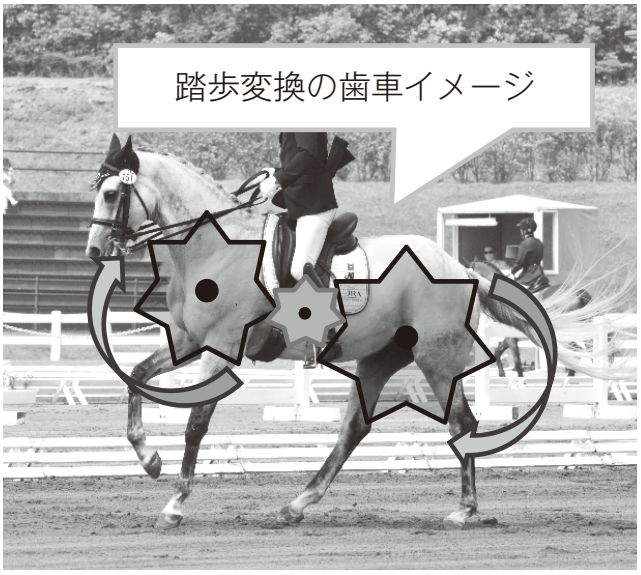
北原広之の ドレッサージュホースに育てよう！

踏歩変換（フライングチェンジ） パートⅡ

②扶助

①準備においての踏歩変換のベースとなる駈歩を作り出せるようになるには、馬のアップヒルバランス、安定したハミ受けにより生まれる透過性（スルーネス）が必要になります。これらによって後躯で生まれる後輪のパワーと前輪の歯車が噛み合うようになり、後肢と前肢が同時に手前を変換するようになるのです。ベースの駈歩を確立していかないまま踏歩変換を実施しても、前回紹介した失敗例の中にあった「前肢（後肢）だけ変換する」ということから根本的に抜け出せなくなってしまいます。調教の初めは、何度も失敗するでしょう。「何度もやっていればそのうち上手くいく！」ではなく、「失敗する要因を見極めて、それを取り除き、次の1回に最大限準備をする」ということが調教だと思います。

そのため、騎手が出す扶助も重要です。先ずは扶助を出すまでのイメージを持ちましょう。



○ 扶助のイメージ

私が考える騎手が行う扶助は、

（1）馬の姿勢変換（次の駈歩ができる体勢へ）

（2）騎手の脚の入れ替え

（3）騎手の随伴と体重移動

の3つに分類しています。

（1）馬の姿勢変換（次の駈歩ができる体勢へ）

競走馬では馬の頭を外側に向けてキャンターを行うことが主になっていますが、乗馬では内方姿勢をとることによって駈歩発進をするように調教しています。だからと言って馬体を曲げれば良いという意識ではありません。基本、馬体は真っすぐにし、僅かに内方姿勢をとり、新しく内方になる肩を軽くしてやるような意識を持ちます。なぜなら、これから肢を入れ替える側に肩がはみ出していたり、馬体全体が傾いていたりすれば変換ができないからです。

例えば、右から左へ踏歩変換を行う際に騎手が行うべき馬の姿勢変換をイメージしてみます。先ず、右駈歩をしながら馬体を真っすぐ（もしくはやや右姿勢）の状態から、やや左に内方姿勢をとります。そのとき、馬の頭がただ左に向くというだけでなく、馬の左肩が左側に突っ張って膨れていないか、肩が真っすぐの馬体の中に収納されているか、を確認します。この時、もし左肩が左側へ歪んだり突っ張ったりする癖のある馬の場合は、思い切って右肩の方向へ出ていくくらいに修正することもあります。そのくらい馬体に真直性がなければ踏歩変換が難しくなります。

これはあくまでイメージですが、右駈歩をしながら左側から風が吹き、馬体全体でその風を受けて僅かになびく、そんな体勢になっていることが踏歩変換の第一準備の基準になります。

しかし、これらはあくまで前躯の姿勢変換であって、これらができたからといって踏歩変換ができるわけではありません。

踏歩変換は、後躯から来る旺盛な推進力の後輪と、前躯が噛み合って初めて成立します。言わば、前躯よりも原動力の後躯の動きが活発であることが重要であることを忘れないようにします。

写真解説

①右駈歩からやや左姿勢をとり（左目が見える程度）

②右駈歩しながら左肩をやや右方向にするように

前躯の準備は僅かに肩の位置や姿勢をコントロールするに留めます。馬が踏歩変換を理解してくるにつれ、これらの準備はどんどん小さいものにしていき、最終的には真直性を保ち何もしないことが最良です。

（2）騎手の脚の入れ替え

踏歩変換を調教する上で、最も決定的な扶助になるのが“脚の入れ替え”になります。この騎手の脚扶助が踏歩変換の主の扶助になります。

よく「内方脚発進」とか「外方脚発進」とか聞くことがありますが、私はそんなことはあまり考えていません。どちらも使います。それもどちらかが強く、ということもありません。もちろん、馬が最も感じているであろう騎手の脚は、外方脚だと思います。それは、騎手の脚の位置が大きく移動するためです。しかし、踏歩変換が安定して実施できるようになれば、外方脚に頼ることを徐々に減らしていくべきです。なぜなら、レベルが上がるに連れ、連続踏歩変換など真直性が求められる場面で外方脚だけの扶助で踏歩変換をしていると、馬体が、特に後躯が踏歩変換の度に左右に振れてしまう原因になるからです。

ただ、ここでは踏歩変換の調教がなされていないケースですので、後躯が左右に振れようと空中で変換をすることを学ばせるために、はっきりと新しくなる手前の外方脚を後ろに引いて駈歩発進の意思を馬に伝えましょう。

具体的な脚扶助の使い方ですが、原則的には内方脚は腹帯横、外方脚は馬の脇腹まで後ろに引いて下げます。正確にどの位置が正しい、ということはありません。馬が何らかの反応を示すことが最重要で、何かを求められていると反応し変化が生じることが大切です。例えば、踏歩変換をしようと新しく外方脚となる脚を後ろに引くと、敏感な馬は蹴り上げたり反抗することがあります。これは、明らかに脚を後ろに引きすぎて、馬が合図として認識するより不快に思っているのです。また、脚を引くと同時に拍車や締め付ける力が強すぎるかもしれません。脚の位置と圧迫する加減を騎手が見つける必要があります。

（3）騎手の随伴と体重移動

騎手の脚の入れ替えと同時に必要で、かつ忘れられがちなのが騎手の随伴です。我々は通常駈歩運動でフルシートをしていると、馬の1歩ずつの動きに同調するように腰を前方に送り随伴しています。踏歩変換は空中における駈歩発進なので、前方への前進気勢が必要なため、この騎手による随伴の動きを失ってはいけません。踏歩変換の脚扶助と同時に、騎手のシートから生み出される随伴を伴っていなければなりません。特に4歩から1歩毎の連続踏歩変換において、この随伴がなくなれば、馬の駈歩自体の前進気勢も失われ踏歩変換が継続して実施できなくなります。

体重移動に関しては、過剰に意識する必要はないと思います。最小限必要な意識は、新しく内方になる側の騎座に乗っていく、という考えを持つことだと思います。

踏歩変換の際に騎手が脚の入れ替えをします。そのとき新しく内方騎座になる側に体重を乗せていく、という意識で十分だと思います。もし過剰に体重移動を意識して行えば、騎手が踏歩変換の度に左右に傾くことになります。それを1歩毎の踏歩変換で行うことは、馬にとってはとても迷惑な話です。

騎手が脚の入れ替えの扶助を出せば、必ず引いた脚と反対側の騎座（新内方騎座）が前出します。真っすぐの体勢の中で前出した騎座に乗っていく、そんな意識を持ち続けることにしましょう。